

時宗は、考へるところがあつて、彼らを鎌倉へ呼んだ。こいつはしめた、と思つたとたんに、乗せられた駕籠がまるで罪人あつかひの物で、杜世忠らはぶつぶつ不平を言ふ。もちろん京みやこを通らせることは汚けがれであるゆゑ、山崎から折れて東海道をのぼらせ、鎌倉へ入つたのは秋九月であつた。

いちおう建長寺へとどめあき、七日の朝、龍たつノ口くちの取調所へ引き出した。執權時宗はこのとし二十五歳、幕府の重だつた役人をひきつれ、威風堂々そこへのぞんで一段たかい上座から元使どもを見おろす。

「たづさへ来る國書をよめ。」

と命じる。杜世忠は、若い時宗の犯しがたい威嚴にうたれて内心びくびくものながら、強ひて威張つた態度をみせてよみ上げる。

だが、だんだんおしまひの方になると、聲がふるへて来る。時宗は無言だ。

國書の無禮な文句が、ときどき彼の頬の筋肉をひきつらせる。

「よし、止めよ。ほかに何も申すことはないか……」

「太守たいしゆさま。これはやはり元げんの機嫌きげんをとつておいた方がよろしうございます。」と、通譯の高麗使が、とりなし顔に口をはさんだ。

「いくらお國が強くとも、元げんがそれよりもつと強いことは、このまへの戦さで御承知ではありませぬか。とにかく和睦わへくして貢物みつぎものをささげ、屬國となられた方が……」

「言ふな、えびす奴！」

時宗はいきなり立上つて、劍持ち役のさしだす兵庫鎖ひやうざ蛭卷ひるまきの太刀を左手につかむと、

「ものども、こやつらを刑場へ引きいだせ。」

「心得て候ふ。」

たちまち、杜世忠らは、今日の片瀬海岸の砂濱にならべて据ゑおかれる。時宗は、三ッ鱗の定紋ぢやうもんちらした白直垂ひただねの露紐つゆひもを背なかにむすんで、彼らの背後に立つた。

「蒙古ひぐりめら、よつく聞け、わが日の本ひもとは、かしこくも一天萬乗の大君のしろしめす神國なるぞ。いま從五位上相模守臣時宗、朝廷みかどのおんむねを體して、なんじらに誅罰ちゆうばつをくはへる。覺悟いたせ。」

さう言つて、はるか京みやこのかたを拜するやいなや、秋水いっせん一閃、氷のやうな日本にっぽん刀たぎのさらめきとともに、元使らの首はつぎつぎと落されていつた。連署の義政や、弟の宗政・宗頼そのほか大ぜいの武士たちが、快心のほほ多みを浮かべながら、時宗のりりしい立ち姿を仰いでゐる。

だが、これを聞いた京都の公卿たちのなかには「幕府のやりすぎだ」といつて非難する者が不在ではなかつた。大國の蒙古ひぐりがこはくてかなはない人々である。時宗とても、いらぬ殺生せつしやうをこのむ人物ではない。彼は、元使を斬ることによつて、上かみは皇室と國體の尊嚴を敵に知らしめ、下は一般の士民が平和のこゑにだまされぬやう、いやがうへにもその戰意をわき立たせようとしたのであつた。

……あくる年の春、時宗は書院にすわつて、大休正念の語録をよみふけつてゐた。庭の櫻の花はいまが盛りで、あたたかい陽ざしが何かこころを浮き立たせるやうに、外では流れあふれてゐるのに、書院のうちは寂然じやくねんとして物しづかである。

しばらく目をあげて、櫻の花むらを眺めてゐるうちに、なぜかあの痛快だつ

た龍ノ口たつぐちの日のことが、ふつと時宗の頭にうかんだ。そして、それと同時に、あなじ刑場で命を失ひかけた日蓮のことも想ひ出されて来た。

(いまごろは身延みのぶの山で、おとなしう本ほんなどを書いてゐると言ふ噂うわさぢやが……) その姿をおもふと、時宗は微笑せずにはゐられなかつた。もともと彼も、何とはなく心の底にひかれるものを感じてゐた相手なのである。弘長三年二月、佐渡遠島あんだうをゆるして、鎌倉へ歸らせたのも時宗であつた。

そして、文永十一年四月八日、平左衛門頼綱と言ふものの願ひによつて、彼は日蓮を屋敷に引見いんけんした。これは、一世の英雄相模太郎と、古今の傑僧立正大師との、最初にして最後の出會しゆくわいとなつた。

日蓮が、そこに呼ばれてゐた他宗の僧侶たちと、あひ變らずはげしい宗論しゅうろんを交してゐるあひだ、時宗はじつと黙つて耳をかたむけてゐた。彼はつひにおし

まひまで一語も發しなかつた。ひとりの武士が、

「では御僧。その蒙古むくがわが國を襲ふは何日いつと仰せられ候ふや。おん身豫言者ならば、答へられぬはずはあるまゝ。」

と、詰めよつたとき、

「經文きやうもんは月日を指さず。ただし、天眼てんがんの瞋いかりしきりであるゆゑ、今年をば過ぎないでござらう……」

さう言つて、日蓮は後もふりむかず去つてしまつた。時宗は、考へにしづむ面持おももちで、しづかにそのうしろ姿を見送る。

——そんな過ぎし日のことを想ひ出してゐるうちに、襖きぬのむかふへ衣きぬずれの音が近づいて来て、時宗は我に返つたやうに振りむく。

「お茶を召しませ。」

と、天目臺をささげて入つて来たのは、彼の夫人だつた。秋田城介安達義景の女、堀内殿と言はれるひとで、嫁いで来てからもう十いく年の月日が経つてゐた。彼女のうしろに従ふは、ことし五つになる幸壽丸(貞時)だ。

「あう、幸壽も来たか。どうぢやな、父といつしよにお茶をのまぬか。」
走りよつてくるわが子の口へ、塗椀をあてがふと、すぐ顔をしかめて逃げて
行く。

「ははは、やつぱり苦いと見えるのう。これを取らせる。」

時宗は、たのしさうに笑つて、羊羹を一つ幸壽丸へつまんでやつた。母夫人もほほえみながら、

「あのを、いつぞやの屏風の表装が仕上りまして、ただいま東の外侍に置か
してござりまするが……」

「さうか。よし、見に行かう。幸壽も来いよ。」

と、手をひいて、渡廊をいそいで行く。かねて、詩は日野資宣、歌は葉室光俊、そして繪は藤原伊信などにたのんで描かし、作らせておいた三十六人の詩歌屏風なのである。中でも伊信は、有名な繪の名人信實の孫にあたつてゐた。

やがて、その美しい屏風を目にすると、何ともいへない喜ばしげな表情が、時宗のおもてに浮かんだ。すべて日本の武人の花とうたはれる人々がさうであるやうに彼もまた風雅をこのむ英雄なのであつた。かうしていつまでも飽かず、美しいものに見入つてゐるとき、彼の心はほんたうに幸福な感情がみちみちてくるのであつた。

「父上、蒙古はまた攻めて来ますかえ。」

と、幸壽丸がたいくつさうに時宗の袖をひつぱりながら、そんなことを聞いて

た。何か屏風の繪にでも、子供ごろの聯想を呼ぶものがあつたのだらう。

「來るとも、來るとも……またぢきにやつて參るぞ。」

時宗は、うなづいてみせて、それからわが子の腫のなかをじつと見つめるやうにして、

「よいか。そなたも大きくなつたら、あつばれ鎌倉武士として、み國に御奉公いたすのぢやぞ。ゆめ北條の家の名をけがしてくりやるなよ……」
と、やさしくさとした。

(たとへ北條の家はほろびてもかまはぬ。己は死し、道は生きる……)

ふと、父の時頼の遺言が思ひかへされた。君がため國のためならば、一身一家はどうならうと構はない。君國のために死んでこそ、この罪多きはかない身も、たふとい御稜威の光りのなかに美しくよみがへるのだ——と、時宗はおも

つた。

無學祖元

普寧ゴツタン菴が、建治二年に八十歳で入寂し、蘭溪道隆もまた弘安元年に六十六歳で歿したから、時宗は誰かえらい宋の坊さんを日本へ招きたい、と考へた。

そこで、建長寺のふたりの禪僧が支那へわたり、明州の天童山へのぼつて、無學祖元と言ふりつばな高僧に會ひ、そのよしを告げて來朝を乞うた。かうして、祖元がいよいよ日本へ來たのは、弘安二年の六月のことであつた。

時宗は大いによろこんで祖元を迎へ、禮をもつて建長寺第五世の法席に坐ら

れんことを願ひ、その後しばしば寺に訪れて心の教へをうけた。何しろ祖元と言ふ坊さんは、かつて支那の温州うんしゅうにゐたとき、元の兵士が亂入して來て彼をとらへ、白刃はくじんを首にさしつけると、少しも騒がず、

乾坤けんこんに孤筇こきやうを卓たつる地なし

喜得す人も空くう、法もまた空なるを

珍重せよ大元三尺の劍

電光影裏、春風を斬るべし

と言ふ偈げを詠じて、元兵どもを退散させたといふぐらゐだから、時宗の精神をますますつよく鍛へるために、大そう深い感化をあたへた。

祖元が建長寺へ入山すると、拈香ねかうの儀式といふのがあつて、そのとき彼は香を拈つんでくゆらしてから、まづ聖壽の萬歳をお祝ひし、やがて次々と將軍や執

權のための祝ひをしてゐる。さうして、時宗に對しては「……永く皇家の柱石ちゆうせきとならんことを」祈つてゐるのである。祖元が大義名分をわきまへた僧侶であることは、この言葉によつても知られ、さういふ態度もまた時宗の氣もちに相映じないはずはなかつた。

弘安四年正月、時宗は年始のあいさつかたがた祖元をたづねて、何か心得になるやうなことを聞かしてほしい、と願つた。

「煩惱ぼんのうすることなかれ！」

と、祖元はこたへた。煩惱とは、人間のもつてゐるさまざまの慾のことをいふ佛教の言葉で、人間にはその種の慾が百八ツもある、とお經にかいてある。

「煩惱はどこから來ますか。」

「時宗だ。時宗からくる。」

「私から？ どうしたらそれを來させないやうにできませうか。」
「その私を去れ！」

と、祖元は激しくひびくやうな聲でいつた。

(さうか、さうだつたのか……)

時宗は、急にはればれとした氣持になつた。何となく、道といふものがわかるやうな氣持がするのだ。私を去るといふこと。己を殺すといふこと。それはやはり大義に生きるためのものではないのか。

——建治三年四月に、義政が連署をやめてから、幕府の政治はしばらく時宗の獨裁となつてゐた。戦争などの場合には、その方が便利なこと多いのである。時宗は自分の思つたことをすぐ實行に移すことができた。さうして着々と敵にたいする防備をすすめていつた。

南宋といふ國がほろぼされたのは弘安二年で、たくさん將兵が元に降つた。その中に夏貴だとか范文虎だとかいふ漢人がつて、これらの者をまつ先に使つて、こんどの日本遠征をさせよう、と忽必烈はするいことを考へた。

それで夏貴・范文虎らは、まづ手下の部將である周福や變忠を使者として、わが國に送つた。時宗は、もう彼らを鎌倉までつれて來さす必要もないから、命令して博多で斬らせてしまつた。弘安二年七月のことである。

同年十月、東國の武士をたくさん九州へ下らせた。あくる三年五月わが九州の漁民が高麗の海岸を侵すことがあつた。閏七月二十一日、幕府は内侍所に神樂をもよほし、厭穰をした。

かうして日本は、待つあるをたのむ體勢をととのへながら、密偵などによつて敵の動きを監視してゐた。建治三年十二月、元は高麗にいひつけて、軍艦を

こしらへさせ、また自分の國內でもどんどん大きい船をつくつてゐる、といふ報告がもたらされた。

その後、高麗とのあひだに何か問題ができたり、またち膝元の漠北ぼくほくに内亂があつたりして、とても當分は攻めて來ないだらう、といふ知らせもつたはつた。しかし、元げんは必ずやつてくるのである。建治元年から弘安三年まで、六年の月日は嵐のまへの静けさをふくみつつ過ぎ去つた。

時ぞ弘安四年

弘安四年(皇紀千九百四十一年)、こを蒙古のこよみでいふと至元十六年の

正月、世祖フビライ忽必烈は、果して第二回派遣軍の大編成をおこなつた。

まづ、征東行省といふ日本征伐の總司令部のやうなものまでつくり、前回の敗將である忽敦を又もや征東元帥に任じて、北軍(東路軍)を統率させ、右丞相シヤウシヤウの洪茶丘ハンチャウクが副將。この兵力はおよそ四萬——主として蒙古・漢人である。

江南軍は、阿剌罕アラカンといふものが大將で、左丞相の范文虎が副將。この兵力はおよそ十萬——主として南宋の兵士で、西域やら土耳其トルコやらもいろいろまじつてゐる。かくて戦闘兵力の合計は十四萬人に達した。

ほかに大工や船頭や輸卒ウソクなどが北軍一萬七千、江南軍六萬といふから、人員總計は實に二十一萬を超え、これに高麗の兵士・梢工・水主を加へると三十萬に垂んとする大軍であつた。艦船は北軍九百艘、江路軍三千五百艘、また高麗軍は九百艘で、五千三百艘といふ大艦隊を編成してゐる。

なほ糧食としては、全軍をあはせて米七十萬石(漢石)を積みこむなど、文永の役とは比べものにならぬ、ばかばかしいほど大仕掛けなものであつた。だが大仕掛けなのは兵員艦船の數ばかりではない。出發のとき、忽必烈^{フビライ}があたへた訓示^{くんじ}といふのが振つてゐる。

第一に彼は、無益な殺人をせぬやうに、仲間の不和を起さぬやうに、と戒めた。蠻勇の兵どもではあるが、いたつて素質がわるいことを世祖自身もみとめたのであらう。しかし、こんな命令は馬の耳に念佛だつた。そのことはすぐ後でわかる。

次には、世帯道具^{しやたい}や鋤^{すき}・鍬^{くわ}などを持つていくやうに、と注意した。これは、日本を占領したうへで、彼らを屯田兵^{とんでんへい}として置くための用意である。まさに笑止千萬の訓示ではあつたが、忽必烈なる人間の膽^{きも}の大きさは學んでよいものが

ある。遼陽に設けてゐる征東行省を、ささざきでは日本の内地に移して、さらにあちらこちらを攻める足場にしようとしてさへ、彼は考へてゐたのだ。

かうして、北軍は前回どほり朝鮮半島南端の合浦に集結し、高麗軍と合したうへで、六月十五日までに江南軍と壹岐^{いっき}のへんで落合ふ手はずを決めた。高麗軍は、忠烈王の臣將金方慶がこれを指揮したのである。

……五月三日、いよいよ合浦を發した東路軍(北軍)は、ちよつと巨濟島に立ち寄り、その先遣部隊^{せんけん}は、五月二十一日對馬・壹岐の沖合にせまつた。

そして、高麗の兵船は、まづ對馬國佐賀村(上縣郡)の大明神ヶ浦をおそひ、わが漁民たちを虐殺した。忽必烈^{フビライ}の訓示もなんのその、といふけどものぶりである。二十六日、本隊は壹岐國を侵し、武勇無双の松浦黨の奮戦もかひなく、全滅してしまつた。

鳥ぢうの男子はみな殺しにされ、婦女子がとりことなつたのも、すべて文永の役と同様である。かへつてこんどの方がひどかつたかも知れない。蒙古兵も蒙古兵であるが、いろいろさまざまな鳥合うがひの衆のよりあつまりである江南軍が、もし一しよに上陸して来たなら、戦争はそのちのけで、掠奪なんかにかかつてゐたことであらう。

それから北軍は、約束の南路軍がくるのを待つために、壹岐の島へ船をとどめて、毎日毎夜、百鬼夜行の酒もりなどをつづけてゐたが、この飛報は博多・太宰府にもたされて、防備の武士たちをすこぶる緊張きんぢやうさせた。

まさに近づかんとする敵を迎へ撃つべく、弓矢八幡に誓ひをこめて、武者ぶるひ立つたわが防衛軍の陣容は——最高指揮官として北條實政あり。これを助くるものに參謀長格の秋田城次郎盛宗あり。盛宗は、安達泰盛あだちの第二子で、い

まは肥後國の守護代をつとめてゐる。執權時宗にとつては義理の甥であつた。

さては、一軍の將として少貳入道覺惠かくゑ(資能すけよし)、その子經資けいすけおなじく景資、孫の資時らをはじめ、豊後ぶんごの守護職大友兵庫守親時ちかときの子貞親、薩摩の守護職島津修理亮久經しゆりのすけ、肥前の龍造寺季時、その弟家益、季友。筑前の秋月九郎種宗、天草の大矢野十郎種保たねやす、おなじく三郎種村など、いづれも奉公いちづの血にもえた豪の者である。

そのほか、文永の役に馳せ参じた武士の多くも勢ぞろひしてゐるし、中國・四國からも援兵が来てゐる。全軍は、二十五里にわたる石壘によつて陣を布き、またこのたびは前回の經驗にかんがみて、敵が上陸しないうちにこちらから海上へ出撃すべく、船をあまた用意してゐた。

船へさきのとがつた小さい和船が、「蒙古襲來繪詞あきしほ」には描いてある。志賀ノ島あた

りに待機したそれらの舟に、玄海げんかいの風をうけてへんぼんとひるがへる旗じるし。連銭れんせんは安達か、四ッ目は少貳か、二匹龍りゅうに十の字は薩摩の島津か——げにもいさましい光景であつた。

龜山上皇

海をうづめるほどの元の大艦隊が、對馬海峡のあたりに遊戈ゆうがして、一舉に九州を踏みにじらうとしてゐる、といふ知らせは、實にさまざまな流言風説を全國にまきちらした。

さういふ見て來たやうなうわさは、大ていばかばかしいでたらめの作り話

であつて、時とすると味方の不利になるやうなことが多いから、危険さはまるものと言はねばならぬ。

まして當時は、國民にまだ無知なものがたくさんゐて、いたづらに自分の影におびえ戦おのくありさまであつた。

「蒙古むくは、もう長門國に軍ぜいを陸あげして、京みやこへ攻めのぼる最中ぢやさうな。」
「うんうん、何でも怪しげな物の化けが、しきりに北から南の天へ走つてゐるとさふぞ。」

「いや、きのふ中國路から來たものの話では、筑紫の空のあたりに、神馬しんまのたかふ姿がうつつて見えたさうな。これは、國のほろびる前兆ぜんてうぢや、と物知りがいふたとよ……」

そんな流言が次から次へとつたはつていく。ひとびとは仕事もそつちのけで、

とくに京の人心の動搖は、はなはだしかつた。中國・四國の米がのぼつて來ないことも、一そう不安を大きくした。飢死するものも少くはなかつた。

皇室の御軫念は、申すもかしこき極みであつたのである。六月三日には、龜山上皇の仙洞御所において、朝臣たちの評定がひらかれた。四日から石清水・春日・日吉・平野・松尾・北野・吉田・廣田・宗像・大野原など、二十二社へ御祈願のことがあつた。

石清水八幡菩薩堂、東寺、仁和寺、延暦寺その他の諸大寺は、不動法・仁王經法・如法金輪法・孔雀經法・七佛藥師經法を修し、ひたすら蒙古退散の祈りに餘念がなかつた。ために洛中洛外の寺々からは、護摩のけむりが霞のやうに、たなびきわたつたのである。

萬一、夷狄らがみやこに迫るやうな事態に及んだら、後宇多天皇・後深草・龜

山二上皇をはじめ奉り皇族の車駕を鎌倉へお迎へすべく、幕府はひそかにそのことを願ひ申上げてさへゐたのであつた。わが皇城の地を外敵どもが侵す―斷じて左様なことは有り得ないのである。しかし、このことによつても、元寇といふものがどんなに大きい國の危機であつたかを、われらは深く心してかへり見なければならぬ。

されば皇族・諸臣も憂色ふかく、それぞれ晝夜をわかたず灯を點じて、祈禱につとめることがあつた。さきに、時宗が元使を斬つたのを難じた公卿たちも、いまはもはや同心一體、誓つて玉體をまもり奉らんことを期したのである。

後宇多天皇は、神功皇后の狹城盾列池上陵のほか、八陵に奉幣使を立てさせられ、皇國の安泰を祈らせたまうた。

龜山上皇は、去る文永十一年正月、位を皇太子世仁親王(後宇多天皇)へお譲

りになつてからも、仙洞御所において院政を聽かせたまひ、後深草上皇とおんともに、まだ御幼少でわたらせられる天皇をお輔たすけあそばしたのであるが、あたかも外邊さわがしき御世とて、國土と民草のうへにかけさせたまう御心痛のほどは、ことのほか御深かつたことと拜される。

しかもなほ、この弘安の役の六月には、御身おいとひなく、日吉神社および石清水八幡に御祈願のため御參籠さんろうのおんことさへあつたのである。あるひは、「敵國降伏」の文字を三十八枚の紺紙こんしに金泥こんでいでお書きになり、その宸翰しんかんを箱崎八幡の新宮へお納めになるとか、おなじく宸筆しんぴつを八陵へお納めになるとか、また大卷はんの般若心經はんにやんきやうを、轉讀寫經あそばされるなど、御身心の休まる日とてもなかつたのであつた。

そして、六月のをはり、いよいよ元軍げんぐんが博多灣はくたわんに來襲らいしゆし、わが武士たちの血

戦おこなはると聞召さるや、いたくみこころを惱ませたまうて、ただちに春日・日吉の兩神社へ行幸仰せ出だされ、佛教最高の經法である大元帥法だいげんすうほふをおごそかに修せしめられたばかりでなく、同時に伊勢皇太神宮へ勅使をおつかはしになり、玉體をもつて國難に代らん、と遠とほつ御祖みおやのおんまへに誓願せさせたまうたのである。

このとき、上皇の御母大宮院は「あまりに畏れ多いことであるから、それだけには御取止めになるやう……」といふ意味のことを仰出されたが、上皇はつひに御母のおことばをもお用ひにならず、たふとき神裔しんえいの御身をもつて、ただちに外敵を防がんとお決意をおしめしになつたのであつた。

あゝ豊葦原とよあしはらの千五百秋ちひひゃくあきの瑞穂みづほの國！ 上皇のみこころを體して、誰か感奮興起せぬものがあらうか。誰が一死奉公の誓ひをあらたにせぬものがあらうか。

悠久三千年、神のみ末なる皇室を上にあげいただき、下に一致團結せる忠誠の臣民があつてこそ、わが神州は永遠に不滅なのである。

血書と出陣

皇室が、そのやうに國民の精神的中樞として、畏くもおんみづから民草の心をはげましたまうてゐた時、兵馬の權をおあづかりして直接に國防の任にあたつてゐた幕府も、ひとかたならない苦心をしてゐた。

先年すでに九州・山陰などの年貢米をゆるし、地主である本家・領家の持ち分も、兵糧として貯へおかせたりしたが、いままた下知を發して「所領あらそ

ひや不平をやめ、一致して國難にあたるべし」と言ふ命令を下した。このいましめの下知にも、何かしら悲壯なものが感じられる。

執權時宗は、ほとんど寢食も忘れるほどに、心をくだいてゐた。彼は、ある日、自分の指を小刀で刺して、そのしたたる鮮血をもつて、金剛經・圓覺經・般若經を書き寫し、それを建長寺の無學祖元に呈して、祈願をしてもらった。

祖元は、大いにその意氣に感じて、時宗の血寫した大般若經六百卷の供養文に、次のやうな言葉をしるした。

「わが日本國平朝臣(時宗ノコト)、心に深く般若經をまなび、ために億兆の民を保つてゐる。いま外魔が西に來り侵し、國をあげて畏怖のころを生じてゐる。朝臣は勇猛心を發して、血をもつて大部の經を書いた。すなはち金剛・圓覺および般若の諸經である。まごころの感ずるところは、したたる血が海と化

し、その海はまた渺茫べうぼうと果てしなくひろがつていく。

みなこれは、至誠と佛心とのあふれる香りたかい功德くどくの海である。光りに照らして見れば、浮幢利諸佛れんげが蓮華の寶座にあらはれたまひ、いつもこのやうな經を説き、一句と一偈、一字と一畫くわくがことごとく化して神兵しんべいとなることは、ちやうど帝釋たいしやくてん天が阿修羅を征服するために戦つたときのやうなものである。この般若の力を心に念ずるならば、わが軍は戦勝を得て、魔軍はたちまち降伏してしまふであらうぞ……」

ああ、時宗の血書した一句一偈、一字一畫がことごとく神兵と化して躍り出で、元軍を撃滅すると言ふ——かかる大勇猛心をば、大君へのまつろひと、心の師の教へとから、彼時宗は築きあげたのであつた。

かくて、六月ともなれば、元の増遣軍が揚子江口をいでて北上しつつあり、

との報などが櫛くしの齒をひくやうに鎌倉へ達する。早馬・飛脚のゆききは目まぐるしいほどである。

時宗は、みづから最前線に出動したいとおもつてゐた。博多のたたかひの一進一退ぶりを耳にすると、胸は鳴つてくるのである。もしも不幸にして、元軍が九州へ雪崩なだれこみ、本土をさかのぼるやうなことが起つたら、もちろん彼は手足とたのむ坂東武者ばんとうむしゃを引具して、まつさきに鎌倉を馳せ出でたことであらう。

彼は、自分を信じると同じやうに、一族郎等・御家人たちの勇敢さを信じてゐた。戦線へちくつた實政や盛宗、長門を固めさせてゐる宗頼、禁裏を守護しまつらせてゐる義宗——彼らは、心から時宗を敬ひ慕つてゐる身内であつた。

しかし、いよいよ江南軍とやらが東支那海を北上、肥前の沖にあらはれたことを知るや、京都の六波羅武者所にゐた宇都宮下野守貞綱に命じて、六萬の援

兵をひきぬ、夜に日をついで筑前へ急行させた。貞綱も、時宗にとっては義理の甥にあたり、本年わづか十六歳の少年司令官である。

さうして、時宗自身も甲冑かっちゅうに身をかため、おなじく武装した家ノ子従者たちをひきつれて、まづ鶴岡八幡宮に祈念をこめ、ついで建長寺の無學祖元へ出陣のあいさつをしに行つた。

祖元は、そのいさましい姿を見て、大きくうなづき、本堂にむかへてしばらく佛前に經を唱へたのち、自分は朱塗しゆぬりの曲衆まがらひと言ふ禪家の椅子に腰かけて、時宗と相對した。

時宗「大事到來せり。如何んか透得とうとくせん。」

祖元（目を輝かせながら）

「驀直前進！」
はくぢき

時宗（立つたまま、鎧よろひの袖をふるつて）

「喝！」
かっ

祖元（につこりと笑ひ、思はず自分の膝をたたいた）

「獅子兒、真によく哮吼こうこうす……」

かう言ふ風に、禪問答と言ふものは、なかなか氣合ひのこもつたものである。いよいよ重大の秋あきが到つた。この期ごにのぞんで何か教へをいただけませうか、と時宗が聞いたなら、祖元和尚はすぐに、教へもくそもあるものか、ただまつしぐらに進むだけだ、と一言いつた。そこで、時宗が「わかりました、覺悟はどのとほり」とばかり大聲の氣合ひをかけると、和尚は、わが意を得たと言ふ満足で、「若獅子のやうな英雄ぢや。よく叫ばれた、その意氣、その意氣……」と、賞はめそやしたわけである。

それから、時宗が屋敷へもどつてみると、身延山しののげの日蓮の使だと云つて、二人の僧が来てゐる。日蓮のつくつた護國曼荼羅まんだらを、師の言ひつけによつて執權へ贈るために来たと言ふのだ。

時宗は、よろこんでその曼荼羅の旗を受けた。それには、天照大神、八幡大菩薩、南無妙法蓮華經と言ふ文字が、躍動するやうに書かれてあり、弘安四年五月十五日、日蓮、としるされてあつた。

もう私わたくしごとの怨みや憎しみや、国内の小さな争ひなどは、あとかたもなく消え去つてしまつて、老いも若きも女も子供も、一丸となつて國難に當たらうとしてゐるのである。

博多灣の決戦

五月中旬から六月のはじめにかけて、江南軍を待ちながら、壹岐・對馬の海上を遊戈いづさくしてゐた東路軍（北軍）は、何と言ふ知らせもないので、約束の十五日が来ないうちに、たうとう待ち切れなくなつて、單獨行動をとることに決した。すなはち、兵船およそ千八百艘の蒙古・高麗聯合軍は、六月六日、宗像むながたの海上をいろいろと通過し、突如として博多灣の入口へすがたを現した。

想ふても見よ、千八百艘の大艦隊である。それが海を壓してすすんでくるさまは、敵ながら堂々たる威容であつて、こちらの濱からそれを望み見た住民た

ちは、

「ああもうだめだ。あんな大船へぶつかつて行つたのでは、こちらの小舟は粉みぢんになつてしまふだらう。石築地にしたところで、どれほど役立つものか……」

と、絶望のこゑを放つものさへあつた。しかし、手ぐすねひいて待つてゐた武士たちは、いづれも武者ぶるひして起ち上つた。人は少なく、船は小さくとも、目にみえぬ大和だましひがこもつてゐるのだ。

敵も、わが防備のやうすを探ぐるために、數艘のバツール輕疾舟を放つてみて、石壘がえんえんと築いてあることを知ると、總司令の忽敦をはじめ、蒙古、高麗兵どもは大いにめんくらつた。

「高さ二丈五尺もありませうか。これが岸から岸へ何百里となくつづいてをり

ます。あまけにその石壘のてまへには、何萬本と言ふ亂杖を海中に打ちこみ、とても上陸はむづかしいと存ぜられます……」

「だまれ、馬鹿もの。」

と、副司令の洪茶丘が怒つた。

「たかが小石を積みかさねたる子供細工、ひといきに押し崩してしまへ！」
「はつ。」

と言ふわけで、敵船はしやにむに灣内へ突入してくる。すでに玄海島は奪はれてしまつた。東から細長く突き出て博多灣を抱く志賀島へ、敵はまづ上陸をこころみようとするのだ。

志賀島——現在はほんたうの島であるが、そのころは陸つづきになつてゐた。もちろんここにも石築地をこしらへてある。さきの文永の役に勇名をとどろか

せた竹崎季長や、須田次郎秀忠、焼米五郎なんぞと言ふつわものが、必死になつて防戦した。

敵は、あひかはらず機械じかけで弾き出す石弩だの、毒矢だのをつかつて、どンドン攻撃してくる。鐵砲の玉も炸裂する。さすがの季長も支へきれなくなつた。何しろ敵の船は圖體も大きく、背たけも高いので、甲板からはこちらのやうすがまる見えだ。

「まことに、無念しごくに存じ候ふ。このしかへしには、今宵ひそかに夜討をかけて、敵を島より追ひはらひたく……」

と、血まみれの季長が、陣屋へ駆けもどつて報告し、また下知をあふぐと、

「さや。」

全軍の參謀長格の秋田城次郎盛宗は、一だんたかい座にすわつてゐる最高指

揮官、北條實政の顔をちよつとうかがつてから、

「ぬけがけ功名は無用——と、鎌倉どののお達しである。蒙古の戦法かけひきは、すぐる文永の役にてよくぞ存じのはず。われらも隊をととのへて戦ひ、小人数の夜討などは決していたされな。」

と、陣屋の庭にたむろしてゐる大ぜいの武士たちへも聞えるやうに、盛宗は聲をたかくして言つた。

そのうちに日暮れとなり、灣内の能古ノ島(残ノ島)もまた、志賀島と同じい運命におちいつた。元軍はここを占領し、一部の兵を上陸させたのである。能古ノ島は、博多の岸にちかく、大事な據點を敵にあたへてしまつた、と言はねばならない。島の防禦軍を助けるために、こちらから繰り出した數艘の和船は、ざんねんにもみな打ち碎かれてしまつた。

あくる七日の朝、海をながめた武士たちは、思はず目をみはり、「ほう」と息をもらさずにはゐられなかつた。帆檣林立、と言ふ言葉があるけれど、林は林でもただの林ではない。博多灣そのものが、一夜にして帆柱の密林と化してしまつたのだ。そのために、海面もかくれてしまふほどだ。遠い沖のへんまで、帆柱の密林はつづいてゐる。

現實に、かうして敵の大艦隊がわが國土にせまつてゐるのを目のまへにしたら、諸君はどんな心持がするか。必ずや國を守るための攻撃精神が胸にわき立つであらう。元の無数の軍艦をながめた武士たちの氣持もさうであつた。

中でも大友藏人貞親は、矢もたても耐らなくなり、手兵三十騎ばかりをひきゐて、志賀島の方へ駆けいだす。

すると、敵の副將洪茶丘がここへ上陸してゐて、馬の上にふんどりかへりな

がら、前進してくるのに出會した。貞親は雀躍してよろこび、かかつてくる護衛の蒙古兵どもを蹴ちらし、敵將のすぐそばまで近づいていつた。

驚いたのは、洪茶丘である。何やらいかめしさうな金銀のかざりのついた鐵甲が、坊主あたまからすべり落ちるのもかまはず、馬首をめぐらして一散に逃げ出さうとした。

「返せ、卑怯もの……」

貞親が叫んで、五尺餘の筑紫長刀をふりあげ、馬の尻に斬りつけた。馬は前足をあげ、いななきあはれる。そのはづみに洪茶丘はころげ落ちた。

「えいっ。」

「うわッ。」

長刀の下をくぐつて、どんどん松林のなかを脱れいく。追つかけようとする

貞親を、蒙古兵どもが何十人となく取りかこんで妨げる。

やがて、そいつらを薙でぎりにして、従ふ十數騎とともに、海ノ中道なかつちを州崎さしきづたひに、西戸崎さいとのへんまで追跡してみたが、つひに敵副司令のすがたを見失つてしまつた。貞親が、ばりばり齒がみして口惜しがつたのはもちろんである。

夜討ち

さうした武勇は、いたるところで發揮された。とりわけ痛快だつたのは、夜襲しよの大勝利である。

安達盛宗からそれはとめられてゐたけれども、血氣さかん、腕のうづらづす

る連中は、たうていがまんすることができなかつた。まして、得意の夜襲戦である。七日の夜から、灣内の敵船にむかつて、ひんびんと夜討ちがかけられた。

まづ、肥前國唐津からの住人、草野次郎經長つねながは、わづかの手兵をひさる、闇にまぎれて志賀島しがのの敵をおそつた。西戸崎さいとから島の突端へかけて、目白押しにならんでゐる黒い船影せんえいを、ひとつふたつと數へ、

「それ、熊手くまでをかける。」

と、合圖あひづをすると、二艘の小舟から鐵の熊手が、大船の横腹へひつかけられる。またたくうちに、一同が千料船へ乗りうつると、やうやく氣付いた蒙古兵どもが、うろたへ騒ぐのを、

「天罰おもひ知れ！」

とばかりに、片つばしから切り倒す。中には寢とぼけたり、逃げ場をうしな

つたりして、ざぶんざぶん海中へとびこむ奴もゐる。かうして、持つてもどつた敵の首だけでも二十一と言ふから、船中の死傷者は無數であつたらう。歸りに火を放つておき、その火がまつ赤な焰となつて船を焼き沈めるのをかへり見ながら、經長主従らはどつと勝鬨かちどきをあげたのであつた。

……その夜から、元軍の警戒がひとしほ厳しくなつたことは言ふまでもない。灣の内外をうづめた船が一せいに火をたいて海上を照らし出した。夜討ちに出かける武士たちの犠牲者ぎせいしゃがふえて來た。

しかも、その危険をおかして大成功をおさめて歸つたのは、伊豫國の住人、河野六郎通有かしのみちあり、當年三十二歳の勇士である。

彼は、文永の役の頃から、氏神の三島明神みやうめいじんへ願をかけ、もし今後十年のうち敵が攻めて來なければ、一族をひきゐてこちらから蒙古を征伐にいく、と言

ふ起請文きせうもんをかいて、神前にそなへたのち、その誓紙を焼き灰をのみ下したと言はれるほどの豪の者だつた。

かくて、通有とその子十四歳の通忠みちただ、伯父伯耆守通時、郎黨十人たらずをのせた二艘の舟は、しづしづと闇をぬつて、志賀島と能古島のこののあひだを通りぬけながら、灣口の方へすべつていく。なるたけ大將分のゐさうな船をえらんで、襲撃しようと言ふのだ。まさに、大膽さはまる敵前渡海の決死隊である。しかも、通忠はまだ紅顔かれんの少年、父にせがんで行をともししたのであつた。

その時、とつぜん松火たいまつのやうなものがたくさん頭上から降つて來て、通有らみちありらの乗つてゐる小舟は明かるく照らし出された。はるか敵船の甲板かんぱんでわいわい騒ぐ聲がし、雨のやうに矢がそそいでくる。

「うぬ、見つけをつたか。ものども、さそくに乗りうつれ！」

と、通有は下知して、小舟が敵船へびたりと横づけになると、みづからまつ先に立つて、ましろのやうに攀ぢのぼつて行つた。

そして、甲板に足をかけたたん、左右から突き出してくる長槍を、見事にうちはらひ、通有はいきなり船中へ躍りこむ。伯父の通時が、刀をふりまはして通忠や郎黨たちの道をひらいてやる。胴の間へ下りて、まだいい氣持さうに眠つてゐる奴を、片つばしから刺し殺し突きころし、あらかたこの船の敵兵は退治してしまつた。

通有が舷へ立つてみると、となりの船とのあひだは一二間だ。となりの船でも騒ぎを知つて、起き出して來たらしい。

「よし、帆柱を倒して橋をかける……」

と叫んで、郎黨らと力をあはせ、大刀で切りたふし、うまく架け橋にした。

それを通有がつかはつて、となりの敵船へ乗りうつると、狙つてゐたのか、弩ではじき出す石が彼の左の肩にあつた。

「おのれ、小癩な蒙古どもッ」

と、ますます猛り狂つた通有のすがたは、まるで向かふが本場の虎のやうだ。

扇ちらし紫綾の鎧直垂に、伏繩目の腹巻も、自分の血と返り血とで赤く染まり、敵のかざす松火の明かりに、ものすごく照らし出される。

雑兵にはかまはず、通有がどんどん進んでいくと、ひとつの船室に、王冠のごときものをかむつた髭づらの大男が、傲然とひかへてをつた。

「やあ、何者なるぞ、名をなれ。われこそは伊豫國の住人……」

と怒鳴つても、相手には通じない。だんびらを抜いてかかつて來ようとするのを、すかさず組みついて膝の下に敷き、しばりあげて生け捕りにしてしまつ

た。これに恐れをなした部下どもは、解はらで逃げ去つたのか、死人のほかにはほとんど姿が見えない。

だが、こちらも伯父の通時がかなりの深手ふかてをかうむり、また郎黨五人が討死した。初陣ういぢん十四歳の通忠はどうかといふと、これも腕から血を流してゐる。はじめ敵の矢がささつたとき、

「えい、くそッ！」

といつて、いきなり自分で引き抜き、へし折つてすてたのだ。これにはさすがの通有も驚いた。わが子ながら豪氣である、と舌をまいた。やがて、應援に來た赤星、大矢野兄弟らの船でかへる途中、つひに伯耆守はうきのかみ通時は息をひきとり、ほまれの最期さいごをとげた。

かうして六月十三日まで八日間、激戦が陸と海とでくりかへされた。しかし

わが軍がよく防いだのと、石壘いしりゆうとにさまたげられ、敵は志賀島の一角に上陸しただけで、文永の役のやうに箱崎まで占據されてしまふといふことはなかつた。

そのうち、敵軍のなかに傳染病が発生し、無慮むりょ三千人におよぶ病人が出て來たので、士氣いよいよ失はれ、一たん肥前國の鷹島たかしま(長崎縣北松浦郡)まで退却し、さらに壹岐へ引きあげて陣を立てなほすといふありさまであつた。さうしてひと息いきいれたり、傷病兵の手當をしたりして、江南軍のくるのを待つ考へなのであつた。

これに對して、わが方はあくまで追撃の手をゆるめず、一舉に敵軍をせんめつして壹岐、對馬を奪ひかへさうと企てた。六月二十九日、八十四歳の入道かみ覺あき惠ゑ(資能)をもまじへた少貳一族、合田がふだ遠利、秋月種宗、草野經長らの分乗する十じゅういく艘の舟艇しゅうていは、波を蹴たてて壹岐をおそつたのである。

ここに彼我いりみだれて、凄絶さはまる海戦が展開された。さきに文永の役の多々良濱で、矢合せの先さかけをした少貳資時は、いまなほ十九歳の若武者。しやにむに島へ舟を乗りつけるやいなや、敵の宿營めがけて突きすすんだ。またたくうちに、敵のならべた楯をうち破り、元、高麗の兵を追ひまくつてゐる時、むねんにも敵のはなつた毒矢が、ぐさりと彼の横腹を射たのである。

「あつ。」

と、よろめき倒れるのを見て、父の経資が矢ぶすまの中を走りよつた。

「傷は浅いぞ、氣をたしかにもてッ。」

「むむ、残念……父上……」

毒がまはつたのか、資時の唇はみるみる蒼ざめて、紫いろにかはつて來た。

「むくりを、むくりを一人のこさず……」

さういつて、きつと敵陣を睨んだまま、父の手に抱かれて死んでいつた。花々しくも壯烈な戦死である。また、老人の資能も深手を負うて、やがて死んだほか、わが方はおびただしい犠牲者を出したが、ひどく敵の心膽を寒からしめたうへで、悠々と凱歌をとなへながら博多へもどつて來たのであつた。

なほ、敵の一部隊およそ三百艘が、中國勢をけんせいするため、玄海灘から長門の岸へまはつたが、これは途中で難破したり撃退されたりして、目的を達することはできなかつた。全線にわたつて、味方はぜつたいに優勢だつたのである。

神風また吹く

かの十萬の江南軍は、主將の阿刺罕アラカンが病死して、阿塔海がこれに代つて總司令になるなどのことがあつて、北軍との約束よりもすつとおくれ、六月十八日に慶元ニンボウ（寧波）を出航した。

やつと肥前の平戸島（長崎縣）に着いたのは、六月下旬のことである。それから東路軍（北軍）とれんらくをとつた上で、七月二十七日を期し、兩軍の主力をもつて鷹島に移動し、ここを根據地としていよいよ總攻撃を加へることになつた。

南宋人らに乗せた三千五百艘の新手あての艦隊が、ぞくぞくと集結してくる肥前の海は、まさに押しあひへしあひの騒ぎである。だが、この情報をうけとつたわが軍の士氣は、ますます高まるばかりであつた。それに、こちらでも、宇都宮貞綱の指揮する六萬の増遣部隊が、おそくとも閏七月うるふのはじめには、博多へ到着するだらうと豫想され、一そう力強い感じをあたへた。

さうした大決戦の機運が熟しつゝある七月晦日みせか（二十九日）の夜から、あくる閏七月一日の朝にかけて、九州一帯をもつごい颱風たいふうがおそつた。いつもこの季節には大風が吹くのであるが、その晩のあらしはとくべつ激しかつた。

「これはたまらぬ。蒙古びくりどもよりもすんと恐ろしい風ぢや。」

「文永十一年にも吹いたが、こんどもまた、賊をこらしめるための神風かもしれぬぞ。」

そんなことを話しあつて、蒲團を頭からかむつてゐる。勇士たちも雷さまはこはいと見えた。じつさいそれは、天地も裂けるやうな雷鳴であり、電光であつたからだ。

ところが、一日（新暦の八月二十三日）の朝になると、あれほどの大暴風雨が、きれいに過ぎ去つてしまつて、拭つたやうな青空に日輪がキラキラと輝やいてゐるのである。

「御注進！ ただいま物見の兵が唐津、伊萬里へんより馳せもどつて傳へ候ふには、ゆうべの嵐のため、蒙古の兵船ごとく難にあひ、あるひは海に沈み陸にのりあげ、あるひは雷にうたれるなど、あはてふためきの様子にござりまする……」

「なに、ゆうべの嵐のためにな。」

秋田城次郎盛宗は、喜色をおもてにたたへながら、さつそくそのことを北條實政へ言上する。期せずして武士たちの歡呼のこゑは、博多陣屋のここかしこにひびきわたつた。

そのころ、肥前の海岸の住民らは、大しけの恐怖がまだ消えやらぬままに、起きいでてはるか鷹島の方に目をやつた。そして、彼らは何を見たか。帆柱はたふれ、板は吹きとび、むざんな骸となつた元の兵船が、頭をさげ腰をおとし、あるひは横たふしになつて海をうづめてゐるのである。

「なんとまた神風が吹きたまうたのぢや。」

「あゝ、ありがたや、忝けなや……」

と、狂喜して、天を仰ぎ砂濱にひれふしながら感謝の祈りをささげるとき、彼らは知るや知らずや、はるか天上の雲わきて神人の翔けるすがたを。國の子

らが勝利を祝ぎ笑ぎたまう神々のみ聲を。

敵艦覆滅！ この大暴風雨の一夜でもつて、元軍の死者は十萬、逃れしものは二三萬にすぎず、高麗軍の死者も七千人にのぼつたといふ。すでにいくたびかの博多灣、壹岐沖の海戦または陸戦によつて、命をおとした者を數へるならば、敵は實に十數萬といふおびただしい犠牲をはらつたわけである。水ぶくれとなつた蒙古兵どもの死體が、それからいく日となくひきつづいて、筑前、肥前の海岸へうちあげられて來た。

かくて、天祐神助をいただいたわが軍は、少貳三郎左衛門景資を大將とし、島津久經、比志島時範、松浦黨のめんめんが、百餘艘の大小軍船を駆つて、鷹島附近の殘敵をせんめつすべく、勇みにいさんで進發した。

何しろ、逃げるに船はなしといふわけで、やぶれかぶれの蒙古兵どもは案外に頑強な抵抗をこころみ、その勢ひは侮られないものがあつた。しかし、わが軍は閏七月七日までにこれを掃蕩してしまつたのである。「八幡愚童訓」といふ本に、

「異國人ドモ、船ガアラバ逃ゲモシタデアラウニ、今ハコレマデト必死ニナツテ戦ツタ。組ンデ海ニ入り刺違ヘテ死スルモアリ、落チ重ナツテ首ヲトリ、射伏セ切伏セ打伏セテモ勝負ヲスル。敵モ味方モ數シレズ討タレタ。千人ホド敵ガ残ツテペコペコ頭ヲ下ゲテ降參シテ來タガ、ソレボツチ生カシテオイテモ無益ナリトテ、中河端ニテ首ヲ斬ツタ……」

と、書いてある。この千餘人の捕虜、中でも、元に國をほろぼされ、何やらわけもわからず日本遠征に送られて來た南宋人だけはいのちを助け、それぞれ生業につかせて、わが國にとどめおいた。

かうして、弘安の役もまた日本の大勝利にはつた。鎌倉武士たちの勇戦力
闘に加ふるに、天の助けが下つて、よく敵の大軍を潰走せしめることができた
のである。

日本は神國であるから、神も人も一しよになつて戦ふといふやうなことも、
キリスト教などでいふ奇蹟とはまるでちがつた自然のできごとなのである。國
民もまた、それを自然な氣持で感じる事ができた。

……勝報は、早馬によつて閏七月十四日六波羅にもたらされ、北條義宗はた
だちにそのよしを上聞に達するとともに、鎌倉へ飛驒した。

皇室のおよろこびは如何ばかりであつたか。その國難の日の重大を今にして
想ひゑがき 龜山上皇の御決意を拜し、そしてこの皇軍の勝利を嘉せられたま
ふ大御心を仰ぐとき、われらはただ涙の頬をつたふるのを禁じ得ないのである。

幕府や國民の歡喜も、もとより想像を絶するものがあつたはずだ。

たまたま勝報は、勅使中御門經任が、伊勢皇太神宮へ祈願をこめて歸つた日
に、京へとどいた。また、敵艦覆滅の日は、後宇多天皇が勅使御差遣のため神
祇官へ行幸あそばされた日にあたることなども判かつたりして、一そらひとび
との心に感じさせるものが多かつた。

神異を物語るものとして、伊勢の風神社の神殿から、七月二十九日に赤雲が
わきいで大風と化した。石清水八幡宮の鐙矢が西にとんだ。あるひは高野天野
明神の鈴が鳴つて、神の出陣があつた——などといふ評判がおこなはれた。お
のちのさもあるべきことと思はれるし、すべては大御稜威のたまものなのであ
つた。

すなはち、後宇多天皇は、勝報を聞召された閏七月十四日、ただちに石清水、

賀茂兩神社に奉幣せしめられ、やがて伊勢皇太神宮に勅使をもつて、敵國調伏のことを告げさせたまひ、また八陵、二十二社、諸大寺にも、それぞれ御報告があつた。

そして、幕府に對しては、とくに執權北條時宗の誠忠と勳功とをよみせられ、正五位下に叙せられるむねの御沙汰があつたのである。

英雄は櫻のやうに

前後二回の國難は去つた。だが、決して安心はならない。叩いても叩かれても、元はまたやつてくるかも知れない。蒙古兵どもは「征け、日本には金銀が

わいてゐるぞ。」と、そそのかされて、物とり半分の慾望に駆られながらやつて來たのであらうが、さういふ慾はなかなか根強いものゆゑ、油斷はできない。

時宗は、弘安の役後の十二月、鎮西の將士たちの武功をねぎらひ、さらに一致團結して國防を完うせんことを諭した。四年閏七月には、中國地方の防備を一そう固めさせた。同年九月、鎮西奉行大友貞親は、幕府の達しをうけて、部下將兵の足どめを命じ、船舶の検査などをおこなつた。

弘安五年、時宗の叔父にあたる遠江守北條時定は、筑前に下つて、博多の西の姪ノ濱に館をかまへ、軍事を監督し、ここを奉行所と稱した。六年五月、時宗の甥にあたる修理亮北條兼時は、播磨におもむいて外寇にそなへた。これはあとで述べるやうに、このとし元がまたやつてくるかも知れない、といふ情報が入つたからである。

兼時は、さらに博多まで下つて、姪ノ濱奉行所そのほかを見廻り、もし警備を怠つてゐた者があると、これを戒めた。同年十月、筑紫探題北條實政は、長門探題に轉補てんぽされた。はじめこの探題をつとめてゐた宗頼(時宗の弟)は、弘安二年に世を去つたのである。

だが、幕府はこんども防備にだけ心がけたのではない。文永の役のあとで、こちらから大陸へ遠征するといふ計畫があつたことはすでに書いたが、その夢は今もなほ武士たちの胸に燃えつづけてゐた。

そこで、手始めとして、少貳、大友の兩將を派遣軍の正副司令官とし、これに九州三ヶ國と大和、山城の僧兵などもひきゐらせて、まづ高麗征伐をしようとする時宗は考へた。そのうちに、九州武士の中でも氣の早い連中は、もうどんどん高麗の南西岸のあたりへ出かけて、武勇を發揮しはじめる。かうした挺身隊ていしんたい

が、弘安四年八月ごろからさかんに押し出した。

弱つたのは高麗で、元げんにむかつてさかんに泣きごとを言つてよこすから、世祖フビライ忽必烈はつひに全州といふところに鎮邊萬戸府をまうけ、またあくる五年の正月には、蒙古兵五百をおくつて、全州鎮戍軍ちんじゆぐんを増強した。九州方面のさうした挺身隊は、のちに朝鮮半島から東支那海にかけてさかんに活躍し、海國男子の意氣を見せつけた「倭寇」と呼ばれるものの先きがけをなしたわけである。

さて、元げんの方でも、じつさいに再襲計畫をすすめてゐた。二度の大敗にもかかはらず、三度が勝負をこころみようとする忽必烈フビライの強氣は相當なものである。彼は、早くも弘安の役の翌年九月、高麗、耽羅、揚州などに命じて、大船三十艘をつくらせ、また六年には、一べん癩した征日本行省を復活させて、さきの江南軍總司令だつた阿塔海を、征東行中書省丞相といふ長つたらしい役目につか

せてみたりしてゐる。

だが、もうこりこりした兵士や民衆は、世祖の野望に應じて起ち上らなかつた。さすがの大元帝國も、やうやく落ち目になつたとみえる。せつかく高麗に兵糧二十萬石を用意させ、弘安六年八月を期して三たびの日本遠征をおこなふと決つてゐたのを、前年七月にいたつて急に造船なども中止し、もつばら民力をやしなふことに方針を變へたことは、やはり國の衰へを意味してゐる。

ところが、弘安八年になると、どうもあきらめ切れないのか、忽必烈はまた日本遠征をやると言ひ出したが、こんどは老臣にいさめられて斷念した。すつかり思ひ切つたことを公表したのは、九年の正月七日で、時宗の歿後であつた。元は、日本と戦つてはひどい目にあつたけれど、その領土はすばらしいもので、國としては東洋の歴史のうへに輝やかしい足跡をのこしてゐる。制度文化

は發達し、西域やアラビアの影響をうけて、自然科学なども入つて來た。水滸傳といふやうな文學もあらはれ、倪雲林、錢舜舉、顔輝など、有名な大畫家もこの時代が生んだ。

しかし、わが伏見天皇の御世、至元三十一年（永仁二年）に忽必烈が死んでから、しだいに大元帝國の影はうすくなつた。そして、つひに亡びたのは、わが後龜山天皇の御世のこと、時宗の死後八十四年目にあたつてゐる。

……それはさて置き、時宗のその後はどうであつたか。彼が北條氏のひととして他に比べるものがないほど、勤皇の志あつた人間であつたことは言ふまでもないが、天もそのことを感應してか、よく彼をして國のまもりの大任を果さしめたのであつた。

時宗は、ほんたうに心に奢るところのない人物であつた。英雄と呼ばれるひ

とたちがすべてさうであるやうに、彼もまた素直な明かるといふ心の持主だつたのである。

弘安四年、愛する弟の宗政が、二十九歳の若さで死んだとき、彼は涙をながして嘆き悲しんだ。それから、一そう佛事にいそむことが多くなつた。五年十二月、鎌倉山の内に圓覺寺を建て、無學祖元をそこの開山としたり、六年八月には、亡き弟宗政の供養のために、その遺子師時をして淨智寺を建てさせてゐる。これも鎌倉五山(建長、圓覺、壽福、淨智、淨明寺)のひとつで、今に遺つてゐる。

この弘安六年といふときの春、時宗は一族の業時を連署とし、政務は大いにこれに任せて、自分は一そう深く法の道にたづね入ることをもつて、しづかな日常とした。といつても、時宗をやみくも抹香くさい人物にきめてしまふのは

まちがひである。禪坊主でさへも「身は槁木のごとく、心は死灰に似たるは、頑空に墮罪す」と戒めてゐるくらゐだ。これは「いくら禪の修養につとめるからといつて、からだを枯木のやうに瘠せ細らし、まるでつめたい灰のやうな心になつてしまふのは、これもまた賞めたことではなく、つまらない頑固の罪にあちいるものだ」といふほどの意味である。

時宗は、日本人のやさしく雄々しい氣持を失ふことなしに、佛の道を求めていつたのだ。やさしさと雄々しさ、けだかさと美しさ——つまり、富士山や櫻花のやうな心の持主であつたからこそ、人に仕へられて慈しみを忘れず、人に仕へて禮を失はず、そしてまた、抜くべき時には颯爽と劍を抜くことができたのだといへよう。

まことに、北條時宗は、元寇といふ國難を打破するために、神から遣はされ

たやうな英雄で、その生涯は櫻の花のやうに咲き匂ひ、また櫻の花のやうに早く散り去つたのであつた。

餘 榮

かういふ話もある。弘安の役後、ある日、時宗が建長寺をたづねていくと、無學祖元はそのころ故郷なつかしの念をおこしてゐて、歸國したいといふ希望を彼にもらした。

まづ「檀那を辭し、唐に歸らんことを求む」と題し、

故國望みは斷つ碧天長し

なんぞ更に衰齡夕陽近し

大朝に補報して心すでに畢る

太白に送歸して殘生を了せん

と、こんな詩をつくつて、時宗にしめした。けつきよく、えらい坊さんでも、里どころがついたといふわけだ。

時宗はそれを知ると、どうかして祖元の歸心をひるがへし、永く鎌倉にとどまらせようと思つて、ここに發願したのがすなはち圓覺寺の建立なのである。

それほどの好意を無にして歸國するわけにもいかないので、祖元はたうとう骨を日本へうづめる決心をした。そして、また詩をつくつた。

法のために人を求めて日本に来る

珠めぐり玉轉じ荒苔にまかす

大唐沈却す孤筇の影

添へ得たり扶桑一掬の灰

をはりの方の意味は、支那には一本の杖の影(自分のこと)が無くなつて、日本の方に一握りの灰がふえた、と言ふのである。禪坊主は、なかなか洒落れたことを言ふだらう。

弘安七年三月二十八日から、時宗は病氣になつて床についた。四月四日には、出家して法名を道果と名のつた。そして、その日の酉ノ刻(午後六時ごろ)に死んだ。年三十四。

かの「吾妻鏡」は、ずつとまへに文永三年七月をもつて記事を終つてゐるので、父時頼の臨終のやうに、くはしいことが分らないのはざんねんであるが、後世につくられた「北條九代記」と言ふ本には、次のやうなことがしるされて

ある。

「同七年四月四日、北條相模守時宗、病に由つて剃髪し、法名道果とぞ號しける。去年の春の初めより、何となく心地煩ひ、打臥し給ふほどにはあらで、快らず覺え、關東の政治も合期し難く、北條重時の五男彈正弼業時をもつて、執權の加判せしめらる。

今年になりて、時宗取分けて病重くなりぬれば、内外の上下大に驚き奉り、さまざま醫療の術をたのみて、耆扁が心を差招くと言へども、更にその驗もなし。今は一向打臥したまひ、漿水をだに受けたまはねば、諸人足手を空になし、神社に幣帛をささげ、佛寺に護摩を修し、精誠の祈禱を致さると言へども、天理に限りあり、命葉保ちがたく、漸々氣血衰耗し、この世の頼みも失りたまひて、圓覺寺佛光禪師祖元を戒師として出家せられしが、同日の暮方に卒去し

たまひけり。

行年三十四歳。寶光寺殿とぞ稱しける。去ぬる文永元年より、今弘安七年にいたる首尾二十一年、天下國家の政道に晝夜その心を碎き、朝昏その思ひを費し、未だ榮葩の盛りをも越えずして、命葉たちまちに零ちたまひけるこそ悲しけれ……」

かくて、一世の英雄北條時宗は逝いた。夫人の大内殿は、そのとし髪を切つて覺山尼と稱し、あくる弘安八年、鎌倉山の内に東慶寺をたてて、ながく良人の菩提をとむらつた。次いで九年九月には、無學祖元が入寂し、さらに三年後の正應二年十一月には、大休正念も頓世してゐる。

執權職は、十四歳の一子貞時が繼いだけれど、時宗死後の幕府と言ふものは、ちやうど世祖忽必烈のあとの元の運命にも似て、しだいに没落の方向をたどる

ばかりであつた。貞時のあと、師時、宗宣、熙時、基時、高時——と、執權はつづくが、この高時にいたつて、鎌倉幕府はつひに崩れ去つてしまふのである。

すなはち、元弘三年五月二十二日、新田義貞の義軍は長驅して鎌倉にせまり、高時をはじめ一族ごとく自殺して、ここに北條氏はほろんだ。さう言ふ汚名の家に人となつて、ひとり時宗こそは彗星のやうなあらはれ方をし、しかも太陽のやうな不滅の光りを、後世にまで放つてゐるひとと言はねばならない。

今日、諸君は鎌倉の地をおとづれて、建長、圓覺兩寺や極樂寺の馬場が谷戸、あるひは龍ノ口のあたりへ足をはこぶとき、頼朝以來のひとの世の榮枯盛衰と言ふよりも、ただかのはるかなる青年執權のおもかげのみが、つよくその心にうかび上つてくるだらう。

また、筑前博多にあそんだことのある諸君は、今津の濱の防壘のあとを眺め、

箱崎海岸に立つて殘ノ島や志賀島などのうかぶ博多灣をのぞみ、そして東公園の龜山上皇の御銅像、日蓮上人の銅像を仰ぐとき、萬感こもごも胸にせまるものがあるだらう。

畏くも明治天皇は、日露の役たけなはなる明治三十七年五月十七日、神奈川縣知事を策命使として、時宗にたいし左のごとく有難い贈位の御沙汰をたまはつた。この五月のはじめ、わが第三次閉塞隊は、旅順港ふかく突入し、全員血潮の花とちりながら、よくその任務を達成したのである。

故正五位下相模守

北條時宗

贈從一位

特旨ヲ以テ位階遷陞セララル

策命文

「天皇の大神におはせ、故正五位下相模守北條時宗の墓前に宣はくとのたまへる。汝命は、文永の役の昔、蒙古國王わが國をうかがひ、國內みな驚き騒ぎ、天皇のいたく大御心を惱ませ給へることを畏み奉り、彼國より献れる牒狀をしりぞけてその無禮を責め、使者を罰なひて、皇國の御稜威を恐れましめ、弘安四年ここだくの敵ら海をわたりて西國に寇するにあたり、國々將士に仰せて防ぎ戦はしめ、天下の安さも危さも、一向にその我身に負ひ持ち仕へたてまつり、宸襟を安め奉りし勳功を褒めたまひ愛でたまひ、今度特に從一位を贈り、位記を授けたまふ。是を以て神奈川縣知事從三位勳三等周布公平を差遣はして、此の如くの狀を宣給くとのたまへる。」

そして、昭憲皇太后をはじめ奉り、各宮家からもそれぞれ御歌をたまはつて

ある。鎌倉山の松籟清々^{しゅうらいすがすが}しきところ、地下にねむる時宗は、さだめし聖恩のあつきに感泣したことであらう。

昭憲皇太后御歌

あた波はふたたび寄せずなりにけり

鎌倉山の松のあらくに

結　　び

近く昭和六年には、弘安ノ役六百五十年を記念して、朝野をあげて盛大な式典や講演會が、東京と鎌倉とでもよほされた。その後も、世界の形勢が日に日

に重大をつけるとともに、日本の運命を憂ふるひとびとは、元寇^{げんかう}のむかしを偲びまた時宗のいさをしを慕つて、さまざまな行事をおこなつて來た。

鎌倉時代の武士たちの國體の觀念は、文永、弘安の役によつてますます高まり、やがて建武の中興へとみちびかれていくのである。北條時宗が身をもつてあらはしたやうな「まつろひ」と「まこと」の心は、楠木一族の盡忠において、はじめてほんたうの奉行の道となつたのである。

とくに、二十三で討死した正行のことをおもふ時、わが國の武士たちがいかに若くして國のために殉じていつたか——それは今も昔もかはりない、日本のもののふの傳統であることが分る。元寇のさいも、少貳資時は十九歳で戦死し、そして河野通忠にいたつては、わづか十四歳の初陣で傷つてゐるのだ。

しかし、若者ばかりではない。資時の祖父の資能^{すけよし}は、八十四歳の高齡で敵手

にたふれ、宗助國もまた六十八歳の老軀をひつさげて、壹岐の孤島に玉碎したのであつた。老いも若きも一丸となつて、國の難にもむくこと——これこそ、大和だましひの發露でなくて何であらう。

鎌倉時代は、朝廷に對したてまつりて、恐れ多いことも行はれたけれど、武士たちの心にながれてゐたいつとう純粹なものは、つひに發して、後醍醐天皇の元弘の御快舉をたすけまつた楠氏や名和氏や菊池氏の精神に花さいたのである。一家一族をあげ、家ノ子郎黨ことごとく生死をともしるといふ悲壯な決意は、實にわが武士道の根本をなすものであり、それはけつきよく鎌倉武士たちによつて、心の掟として目にみえぬ形をあたへられたものであつた。

また、北條時宗がしばしば夢みた蒙古、高麗征伐の計畫は、倭寇といふものゝ遠征となつて、とくに吉野、室町時代に勢ひをたくましくしたが、やがて豊

臣秀吉の朝鮮征伐こそは、もつとも雄大なかたちで、その志を表現したといふべきであつた。惜しくもそれは途中で止んだけれども、わが海洋民族の意氣をますます盛んならしむることはできたのである。

さうして明治維新となり、かがやかしい復古の日は來た。維新は、徳川の封建の末に生まれて、純粹な心を生きた若者たちによつて成しとげられ、彼らにとつて尊皇と攘夷とは相ならぶ精神であつた。尊皇すなはち攘夷であり、この二つの事柄は別ものではなかつたのである。されば北條時宗も、そのかみの外敵を打ちほろぼしたることによつて、そのまま大君への隨順の道を完うしたといふべきであつた。

日清、日露の役は、わが國が世界の日本と呼ばれるための重大な攘夷のたたかひであつた。かの日本海々戦に東郷司令長官の下した「皇國の興廢この一戦

にあり……」の訓示は、將兵の胸にありありと元寇のむかしを蘇らしめ、やがて偉大な戦果を知つた國民の胸にも、はるかなる神風の日を想ひ起させたことであらう。神風は、元帥以下將兵のすさまじい攻撃力と化して、バルチック艦隊を吹きとばしたのである。

日本はつひにアジアの希望をになつて立ち上つた。滿洲事變や支那事變が何のために起つたかは、ここで語るまでもない。わが天正元年、支那大陸の最後の王朝である清國がほろびるとともに、内蒙古一帯にかけて、さかんな獨立運動がまきおこつた。運動は、主として若者の手によつておこなはれた。

かつて六百年前、親の國である日本をあなどつて神罰をかうむつた蒙古は、いま子の國としての自覺にめざめ、日本の指導のもとに、あたらしい蒙古を建設しようとした。さうなると、成吉思汗やテムールの血をひく彼らは、このう

へもなく勇敢であつた。

とりわけ、南モンゴリアの青年黨員のあひだには、つよい民族意識が盛りあがつて來た。滿洲國が誕生したあくる年、すなはち昭和八年に、彼らは、シリングル盟の副盟長として人望あつきトムチュク・トンロブを中心に、百靈廟の自治會議をひらいたのであつた。

そして、當時の國民政府のさかんな切りくづしにもかかはらず、彼らは一致團結、つひにその地方は蒋介石政権のさびなを完全に振りきつて、昭和十二年蒙古聯合自治政府といふものをつくり上げ、トンロブ——いまの徳王を指導者にいただいて、新興滿洲國とともに、眞の正しいアジアの歴史を、第一頁から踏み出すこととなつたのである。

つづいて、大東亞戦争が勃發した。十二月八日の詔勅をラジオでうけたまは

つたとき、あるひは畏くも 天皇陛下が伊勢皇太神宮へ御親拜あらせらるるお姿
を寫真でおがんだとき、諸君は身がひきしまるやうな感激をおぼえたであらう。

いまここに日本は、文永の役や弘安の役に何十倍何百倍する重大の秋^{とき}を迎へ
てゐるのである。たしかに國難である。だが、國難といつても、元寇のときは、
どちらかといふと日本は受身であつたが、こんどはこちらから遠くハワイや南
西太平洋にまで出撃していくといふ攻勢をとつたのだ。

つまり、大東亞戦争は日本の理想のためのたたかひである。その理想が、と
ほく神武創業の昔からつらぬいてゐる八紘爲宇の大精神であることは、諸君も
よく知つてゐる。元寇^{げんかう}のいくさとは比べものにならぬ大戦争であることはもち
ろんだが、すでに戦争の意味も大きく發展してゐるのである。

君のため何か惜しまん若櫻ちつてかひある命なりせば

特別攻撃隊の勇士たちは、元寇のときの武士らがしたやうに、神に祈り誓つ
て出陣したばかりではなく、もう自らが神であるやうなひとたちであつた。

「……兵學校卒業一年前後の若武者どもを加ふるこの決死隊が、敵港に突入し
てこの成果^{せいくわ}を揚げたるを思へば、いまの若いものはなどと口はばつたきことを
申すまじきこととしかと教へられ、これまた感泣に堪へざること^{こと}に御座候。」

と、手紙に書かれた山本司令長官が、まもなく自身も壯烈な戦死をとげられ
たことを思へば、もうこの事實こそ神のみいくさの神髓^{しんずい}であるといふよりほか
はない。皇軍は、すべて一族のやうなものである。その一族が、老いも若きも
先頭に立つてたたかふといふ武士道精神は、すでに古くわがますらをの心にむ
ねとするところであつた。

また、ガダルカナルやアッツにおける皇軍の神のやうな姿は、文永、弘安の

役の壹岐、對馬の血戦をしのばせ、しかもはるかに壯絶なものをわれらの胸につたへてくるのである。

いまや戦局はますます重大と知らねばならぬ。いつ何なんどき敵がわれらの目のまへに現れるか——少くともその覺悟はもつてゐてよい。しかも、敵は博多灣はかたをだけ襲ふわけではないのである。血迷つた敵が、わが神聖なる大八洲やしまのいつこの空、いづこの岸べに現れようとも、ただちにこれを叩きつぶす用意をしてゐようではないか。

そして、北條時宗が元使を斬つた心——口先きの平和や、甘い謀略ほうりやくの手にのらぬ鐵石のやうな心もまた、われらが今日もつとも必要とするものであると言はなければならぬ。

一、時宗略年表

御代數	天皇	紀元	年號	年 齡	事 項
八二	後鳥羽	一八五二	建久三年	五十九年前	源頼朝征夷大將軍となる。
八四	順德	一八七五	建保三年	三十六年前	北條時政死す。忽 <small>こゝろ</small> 烈生まる。
八六	後堀河	一八八四	元仁元年	二十七年前	義時死す。泰時執權となる。
八七	四條	一八九九	延應元年	十二年前	時頼妻をめとる。
八九	後深草	一九一一	建長三年	一 歳	時宗、五月十五日生まる。
		一九一七	正嘉元年	七 歳	二月二十六日元服。相模太郎と稱す。
九〇	龜山	一九二〇	正元二年	十 歳	二月、小侍所に入る。忽 <small>こゝろ</small> 烈即位し世祖と稱す。

九六	後醍醐	一九九三	元弘三年	死後 四十九年	五月二十二日北條氏亡ぶ。
九二	伏見	一九五四	永仁二年	死後 十年	忽必烈死す。 楠木正成生まる。
		一九四四	弘安七年	三十四歳	四月四日死す。
		一九四一	弘安四年	三十一歳	五月、弘安の役起る。
		一九三五	建治元年	二十五歳	九月、元使を龍ノ口に斬る。
九一	後宇多	一九三四	文永十年	二十四歳	十月、文永の役起る。 將軍宗尊親王薨す。
		一九二八	文永五年	十八歳	正月、はじめて元使來る。 三月五日執權となる。
		一九二四	文永元年	十四歳	八月十一日、連署となる。
		一九二三	弘長三年	十三歳	十一月時頼死す。

二、参考書

「吾妻鏡」「増鏡」「關東評定傳」「將軍執權次第」「北條九代記」「八幡愚童訓」
 「五代帝王物語」「伏敵篇」「元寇弘安役六百五十年記念會紀要」池内宏「元寇
 の新研究」山上八郎「北條時宗」澤田謙「時宗と日蓮」白井喬二「北條時宗、
 忽必烈」

「日本少年歴史文學選」發刊の辭

淡海堂出版株式會社

聖戰今や八春秋に垂んとす。未曾有の國難に直面し、神州一億皇民の意志、天を衝かむとして、意氣正に昂然たるものあり。この秋に當り、天下の視聽青少年の上に翕然たり。惟ふに青少年の責務たる今日より急迫にして廣大なるものを見ず。皇國の興廢をその双肩に荷ひて敢然蹶起、澎湃たる開闢正に神州に滿つ。

吾等出版人ここに爲す處あらずして何ぞ盡忠の將士に見ゆるを得む。即ち吾等その全力を傾注して青少年の奮起に應へ、その氣魄彌が上にも旺むなるものあらしめむことを期して、爰に「文藝日本」同人諸氏、及びこれと志を同じうせる愛國の文人と相謀り、以て「日本少年歴史文學選」の發刊を企圖す。その主旨とせる處、即ち皇國の本義に徹し、惟神の大道を顯揚せる吾等が先達の至誠盡忠を讃仰し、併せて青少年が魂の基礎的鍊成に資せんとするにあり。

吾社微力なりと雖も、即ち職旆を掲げて立ち、非才と雖も、即ち業旆を翳して大國難に馳せ參ぜんとす。大方識者の絶大なる支持を拜し得れば吾社の榮譽之に過ぐるものなし。

昭和拾八年十二月八日

北條時宗

●定價 一圓七十錢
●特別行爲稅相當額 五錢
●合計 一圓七十五錢
●送料 十五錢

著作者 伊藤 佐喜雄

發行者 酒井 久二郎

印刷者 刈米

配給元 日本出版配給株式會社

發行所 淡海堂出版株式會社

東京都神田區東神田拾番地
電話 浪花 一八六七番
浪替 東京 一七八五〇番
會員登錄番號 一六五一三番

日本出版會承認番號
い310411號



昭和十八年十二月二十日初版印刷
昭和十八年十二月廿五月初版發行(10,000部)

中谷孝雄著 植草 實裝幀・口繪

豊臣秀吉

B 六判 二八〇頁
賣價(税入) 一圓七十五錢
送料 十五錢

本能寺に斃れた織田信長のあとを襲つてつひに天下を平定し大御心を安んじ奉つた太閤秀吉の輝かしい一生を書いた歴史小説。戦に強く才智すぐれた秀吉はまた孝心深い息子であり忠義の心あつい眞の武將であつた。朝鮮征伐のさなかに、不幸息をひきとつた秀吉の魂は、われら國民の中にうけつがれていま南に北に勇戦奮闘をつゞけてゐる。時局下少年の愛讀の書。

970
263



